

こころを育む総合フォーラム・シンポジウム

滝鼻卓雄氏

読売新聞東京本社会長。論説委員、社会部長、同本社長・編集主幹などを経て今年6月から現職。読売巨人軍取締役オーナー。



遠山敦子氏

松下教育研究財団理事長、新国立劇場運営財団理事長。文部省入省後、文化庁長官、駐トルコ大使、文部科学大臣などを歴任。



中村邦夫氏

松下電器産業会長。「企業は社会の公器」がモットー。今年度は日本経団連副会長、地方制度調査会会長などにも就任した。



鷲田清一氏

大阪大学総長。専門は哲学、倫理学。関西大学、大阪大学教授などを経て今年8月から現職。「モロの迷宮」など著書多数。



「不承事のお城の草に寝ころびて空を吸はれし十五の心」。私の古里、岩手県の歌人石川啄木は、不安定ながら澄んだ青春の心を歌った。この懐かしい心のあり方は、西行法師の「吉野山栴の花を見し日より心は身にもそむずなりに」という歌に重なる。心境は違わぬが、日本人の心の世界に響ける気持ちは変わらない。千年近い伝統がある。



山折哲雄氏

国際日本文化研究センター長。宗教学の専門家。専門の「こころ」や文化へのアプローチを続けている。

生は毎回、教室に入ります。黒板に大きな手で島木赤彦の歌を書き、一人その歌を朗々と3度朗唱してから講義を始めた。万葉集に起源を持つ和歌のリズム、五七調か七五調。リズムが、そのリズムに乗せて知識や思想が肉体化していく。そう言う考えだ。たまたま年を重ねて気づいた。和歌は日本人にとって呼吸のリズム、生命のリズムかもしれない。

古典に学ぶ日本の心

基調講演

「不承事や残酷事件が多発している。その反省から道徳教育が叫ばれるようになった。だがその前に、まず古典教育から始めるべきだ。万葉集の愛の歌、和歌の「死者を悼む挽歌」、日本人の生観や自然観、死観、宗教心を自然形で教えることが出来る。日本の歴史に登場してきた思想

家、文学者、宗教家はすべて心の問題を追求してきた。最澄や弘法大師が言うようにしたのも心だ。現代では「殺すな」と言う代わりに、「命を大切にしよう」と言うようになった。かつては神仏が前庭にあつて「殺すな」と誓いのように言い続けてきた。我々が神仏を殺して、近現代の世俗化が進んでいる。人間を超えた力を感じることが希薄になり、心とは何か、考える時期だ。

滝鼻 読み書きを習慣を身につければ教育の基本は築ける。と、月一回の会合でメンバーの方からよく聞いた。マスコミとして、重点的に読み書きをやってきた。NIE(教育に新聞)運動は、教室で新聞を読み文章力や常識を養っていくもの。紙面上では教育問題についてネガティブなことを書き連ねるのではなく、例えば教師の力がどうすれば向上するか特集したことがある。

中村 私たちは全社員で環境問題に取り組んでいる。地球環境にやさしい省エネ、節水に配慮した製品を作り、こうした運動に地域社会と共に取り組むというスローガンで進めている。日本人は、水道の蛇口をひねれば飲み水が出てくるという恵まれた環境にいて、水のありがたさが分からない。地球環境との共存に会社をあげて取り組むことが、心を育む一つの活動になると思う。

心温まる話題も伝える 滝鼻氏
戸惑わず助ける精神を 遠山氏

子供が勝手に育つ。環境をどうやって作るかを考えること。見ていないふりをすると、見ている、近所のおじさんおばさん、まなざしが必要になってくる。滝鼻 渋谷の街では、青少年たちが、朝帰りして行く。近所の人たちは、「なんでこんな時間に帰ってくるんだ」と言わないのか。町内会のおおせつかい役のような人がいないのか。多分見て見ぬふりをしているのかもしれない。全く異なる光景について、身近にいても、が関心を持たず、匿名化する社会になってしまっている。私は非常に危険な方向に向かっていると思う。やはり大人が責任を持って叱るべきだ。

心を育む学校・地域の実践事例が紹介された。東京・豊島区立さくら小学校の関口純一校長は、前任校での道徳教育の取り組みを報告。6年生が東京大空襲について学んだ時は、担架を実際に持って看護師の気持ちに迫り、社会科で戦争の疎開体験を聞いた。総合学習では保護者や地域のひとと一緒に音楽劇を実施。特別活動では1〜6年生が縦割りの班を作って一緒に遊ぶなど、道徳と他の教育活動を関連付けて組織的

総合学習で戦争の音楽劇 企業でミニロボット作り

に指導しているという。また、渋谷区青少年教育コーディネーターの相川良子さんは、地域で子供が活動する取り組みを報告。小学校に和菓子職人を招いて一緒に作ったり、企業のオフィスでパソコンを使ってミニロボットを作ったりした。いじめや不登校の問題を抱えた10代の子供を支える活動では、自宅訪問や仲間が出来る場を提供して、人間のかかわりを回復させようとしている。「包容力を大事にした地域づくりが必要」と締めくくった。

学校・地域の実践事例

明るい芽全国へ

皆で「心」を取り戻す運動を全国へ。各界の有識者が集う「こころを育む総合フォーラム・シンポジウム」が16日、東京・千代田区の経団連会館で開かれた。約500人の聴衆を前に、山折哲雄・国際日本文化研究センター名誉教授が「『こころを育む』という」と題して基調講演を行い、パネリストカッションでは山折座長の司会で4人のパネリストが熱心に意見を交わした。同フォーラムは、今年1月にまとめた「提言」の反響に応え、これを国民的な運動に高めていく方針。日本人の心を見つめ直す試みは実践の段階に入った。

中村氏 企業人と同時に生活者
鷲田氏 大事にされる体験を

い芽を発見し、広げていくことが大事だ。中村 私たちの会社では、4〜10月までで約7400人が在宅勤務を経験している。在宅勤務は社会の最小単位である家庭で、子供との関係が濃密になる。家庭が見直され、親と子供の関係がよくなる。関係を作る一つの答えがあるのではない。ある調査によると、企業と家庭の関係で、男性の帰宅時間が世界一遅いのは日本だ。家庭に軸足を置いて、企業活動を見直す時代に入ったと実感しなければならぬ。

遠山 一人ひとりが何が出来るか考えていくことが大事だ。昨日、ある駅で、若い母親が子供を抱いてキラーバッグを握っていた。初老の人が近寄って、「大変だね」とそのバッグを抱えて手伝っていた。母親は孤独で追いつめられている。そういう母親に出会った時、戸惑わずに助ける精神を持ち合えば少しずつよくなると思う。

中村 全国運動に向けて、企業も参画していかなければならない。我々は企業人であると同時に、生活者であるという意識を持って地域社会に貢献したい。そういった行動が心を育む一助になればと思う。

フォーラムのメンバー16人は次(敬称略、50音順)の通り(敬称略、50音順) 安西祐一郎(慶応義塾塾長) 石井幹子(デザイン事務所主宰) 葛西敬之(JR東海会長) 金澤一郎(国立精神・神経センター総長) 佐々木毅(学習院大学教授) 滝鼻卓雄(読売新聞東京本社会長) 張富士夫(トヨタ自動車会長) 遠山敦子(松下教育研究財団理事長) 中村邦夫(松下電器産業会長) 中村桂子(JT生命誌研究館館長) 野依良治(理化学研究所理事長) 本田和子(お茶の水女子大学名誉教授) 三村明夫(新日本製鉄社長) 山折哲雄(国際日本文化研究センター名誉教授) 鷲田清一(大阪大学総長)

<主催>松下教育研究財団 「こころを育む総合フォーラム」は05年4月、元文科相の遠山敦子・同財団理事長の呼びかけで発足。2年間の討議を経て今年1月に「提言」を発表した。詳細はホームページ(http://www.kokoro-forum.jp/)で紹介している。